

賀川豊彦 再評価を

「共助が今問われている」

授演 賀川豊彦
大名講 神戸大
徳島

日本を代表する社会運動家、賀川豊彦（1888～1960年）の社会活動を知り、今日的意義を考えるフォーラム「賀川豊彦の再評価―21世紀のグランドデザイナーとして」が10日、徳島市藍場の県郷土文化会館あわぎんホールで開かれ、約250人が参加した。

賀川は1893(明治26)年、両親が相次いで死んだため、徳島県鳴門市の本家に引き取られた。フォーラムは、徳島で約12年間を過ごした賀川の業績を再評価しようと「賀川豊彦献身100年記念事業徳島プロジェクト」が主催した。

賀川の活動を紹介し、ベストセラー小説「死線を越えて」の印税収入が現在の価値で約10億円にも及び、すべてを社会活動につき込んだエピソードを披露すると、会場からは感嘆の声が上がった。野尻教授は「互いに助け合う共同体づくりに取り組むことなどは、まさに今問われている」と指摘した。



賀川豊彦の活動について語る野尻武敏神戸大名
誉教授 徳島市藍場

鳴門市大麻町の主婦岡沢祥江さん(62)は「賀川先生は地域の誇り。現代でも考え方など通じる部分がたくさんあることを知ってよかった」。賀川の孫督明さん(56)は「神戸市東灘区には「賀川を通じて徳島と神戸でいろんなつながりが増えてくれるとうれしい」と話した。

(河尻 悟)